

## 〈コラム〉

## 最終講義を終えて

野川 春夫\*

Haruo NOGAWA\*

平成26年3月7日に定年退職教員の恒例の最終講義を終えた。このような機会を企画・運営して下さった幹事の教職員に御礼申し上げたい。また、卒業したゼミ関連の学部生・大学院生が30人超来学して下さったことには、大変感謝している。

『最終講義とは何をすべき場なのか?』退職教員の個人研究の総括、懐古談や自慢話、専門領域の総括など種々様々な形式がある。この15年間、本学部のみならず医学部、他大学の最終講義や最終講演会等に多々出席するたびに感じた疑問でもあった。

これまで個人的に一番感銘を受けた最終講義は、医学部の河盛隆造教授であった。糖尿病の大家である河盛先生は、留学中の研究領域の紹介から始まり、糖尿病に関連する様々な研究知見を短時間に語りつくし、今後の研究課題を明確に紹介し、後進がチャレンジすべき点を示唆されていた。その講義を拝聴しつつ「浅学非才」な自分を見つめていたともいえる。

小職は「平成37年」をテーマとし、サブタイトルとして『団塊世代が後期高齢者になる年』を発表の当日つけた。小職は、スポーツ社会学をベースとした「生涯スポーツ」を専門としてきた。生涯スポーツは、オリンピック・パラリンピックなどの華やかな競技スポーツの対極に位置されることが多く、一般市民の健康増進やQOLの向上などに寄与する社会装置ともいえる。スポーツの進化・衰退は、人口動態、社会変化、技術革新および人々のライフスタイルの変容と密接な関係があり、国民全般にかかわ

る生涯スポーツも例外ではない。65歳以上人口を「中高年」あるいは「高齢者」と十把一絡げにしているが、生涯スポーツがカバーできる年齢層は前期高齢者までではなかろうか。75歳以上の後期高齢者に相応しい『生涯スポーツ』は未開拓というのが現状である。

平成37年(2025)は、1950年生まれの団塊世代も75歳になる年である。ロボット工学、医療工学、水質・食物資源、情報工学、交通工学等々は日進月歩で革新を続け、日本社会にとどまらず生活様式は凄まじい勢いで変容していくであろう。平成37年の人口動態、都市構造、先端医療科学、自然資源、先端技術革新等々がどのレベルに到達しているのか?一般大衆のライフスタイルはどのように変化しているのか?これらのことを予測しながら生涯スポーツのプログラム設計、運動機器の開発、政策の立案、指導法等々を模索・試行錯誤していくことが大学教育と研究に求められる。

米国留学中に大学院の哲学の講義で「Utopia: 理想郷」というテーマでペーパーバックの未来小説を毎週1冊読破し、社会におけるUtopiaとはどのような構成要因で成立するのか、自分の専門分野の位置づけ・価値はどこにあるのか、近未来に予想される変革は何か等々を議論した経験が自分の源泉となっている。今回の最終講義の目的は、先を読み解く力を磨き、近未来の社会構造の中における生涯スポーツの位置づけ等を考えるきっかけにしたかった。限られた時間内で自分の考えを十分伝えられなかったことと、準備不足のまま当日に臨んだことが若干悔い残り、『浅学非才』を改めて実感させられた。

\* 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科  
Graduate School of Health and Sports Science Juntendo University